

# 勿凝学問 375

ノーベル経済学賞とプロパガンダ  
スウェーデン国立銀行賞がシカゴ系を好んだ理由

2011年12月23日  
慶應義塾大学 商学部  
教授 権丈善一

昨日の授業のまくらとして話したことな。

ノーベル経済学賞の正式な名前は、スウェーデン国立銀行賞なんだけど、ここは、プロパガンダの話だから、ノーベル賞という仮面をかぶった言葉を使っておいた方がいいだろうな。まあ、そのあたりは、次でも読んでおいてくれ。

勿凝学問 20 [ノーベル経済学賞と学問としての経済学、そしてノーベルが思いを込めた平和賞](#)

さて、混合経済、福祉国家というのは、経済界に負担を強いるために、経済界が死力の限りを尽くして、福祉国家の生成、発展に抵抗を示すのはいずれも同じ。スウェーデンも例外でなく、スウェーデンの経済界は、当然の如く、高福祉高負担国家に抵抗する。しかし、スウェーデンの労働者組織は強い。なぜ、北欧の労働者組織が強くなるのか、その理由が、一国の「貿易依存率」あたりにある話は、I巻の3章「社会保障と経済政策——平等イデオロギー形成の事実開明的分析」みておいてくれ。

強い労働者組織、そして徐々に普及してきた社会保障諸施策への生活者達からの強い支持のために、スウェーデン経済界の高福祉国家への抵抗は、なかなか思うようにならない。そこで・・・

最も効果があったのは、雇用者集団によって遂行されたプロパガンダ運動だった。彼らは、ノーベル経済学賞に対して自分たちが持っている影響力を利用し、スウェーデン人の経済的思考のうちに新自由主義的な見方を確立しようとした。・・・雇用者側のシンクタンクであるビジネス政策研究は・・・経済の構造と展望に関する本格的な研究に資金を提供し、政策担当エリートや市民に向けて、福祉国家が経済停滞の根本原因だと「科学的に」繰り返し繰り返し証明した。

デヴィッド・ハーヴェイ『新自由主義』157頁

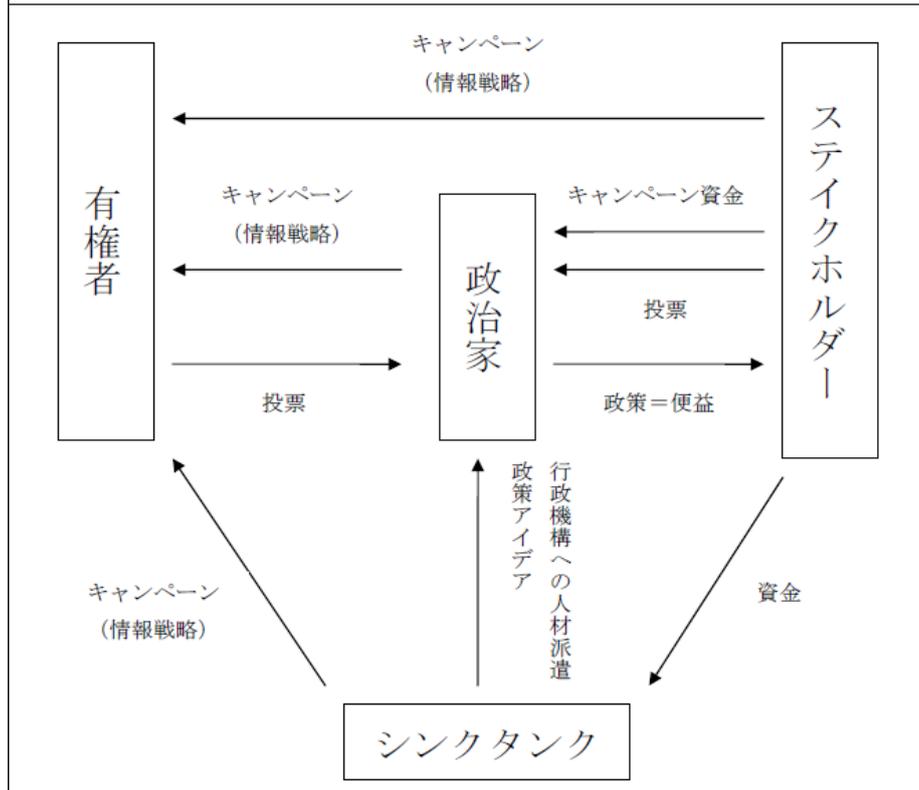
世の中、そういうもんだ。

シンクタンクについては、次の図がある「[勿凝学問 49 最近の日本の仕組み——政治力の均衡として形成される政策形成過程再考](#)」でも読んでおいてくれ。いつも話すように、市

場経済の中に存在するシンクタンクは、アウトプットが売れるか、どこかからの財政支援がなければ存続できない。となれば、当たり前のことが予測されるわけて、僕の言う「資本主義的民主主義」の構成要素の重要な一翼を担うことになる。

2年前、「アメリカで共和党の政策はどのような過程を経て生まれるのか？」を意識しながら横江公美(2004)『第五の権力 アメリカのシンクタンク』[文春新書]を読んだときに、わたくしがアメリカの政策形成過程としてイメージした図。市場に委ねられたシンクタンク、ビジネスとしてのシンクタンクが、いかなる帰結をもたらすのかを想起されたい。

図 2 政治力の均衡として形成される政策形成過程 (アメリカ版)



アメリカのシンクタンクについては「[勿凝学問 72 「天下り」のほかに「回転ドア」という言葉も知っておこうか—学者は政治家よりはましな生き物なのかもしれない](#)」もみておきな。

さて、講義の雑談を、雑談の本論？に戻して、ノーベル経済学賞とプロパガンダの話をするれば、1976年にノーベル賞の栄冠に輝いたフリードマンは、後日、次のような冗談をいう。つまり、ノーベル経済学賞を調査すれば、次の傾向があることが分かります。

- 男性であること
- アメリカ国籍を持っていること
- なんらかの形で「シカゴ大学」に関係していること

新自由主義、シカゴ学派の勝利宣言ってところかな (笑)。

さて、講義では、1994年の世銀年金レポートの背後にあるワシントン・コンセンサスという力の話をします。世銀レポートのねらい通りとも言うべきか、日本でも、公的年金の民営積立方式への年金抜本改革の嵐が吹き荒れる。ここで、その動きは、新自由主義者たちによる陰謀なんだと批判しても、10円位の役にしかたないわけではな・・・ということなので、講義では、年金本体、年金制度の細部の議論を行って決着をつけるべしと話して、その後、延々と年金理論の話、積極的賦課方式支持論の話をしたわけだ。

- なぜ、年金には世代間格差が生まれるのか——段階保険料方式の政治経済的合理性（再分配政策の政治経済学Ⅲ所収）
- なぜ、「高齢者が勤労期に積立しておきさえすれば、高齢化が進行しても次世代の勤労世代には迷惑をかけることはない、もしくはなかった」という世間の常識は間違っているのか——生産物の視点からみた再分配方法（再分配政策の政治経済学Ⅱ所収）

君ら、学生くん達にはⅡ巻の「年金改革論議の政治経済学」やⅢ巻の「2004年、年金改革の意味と意義と年金論議の攪乱要因」なんかを読んでレポートのひとつでも書いてもらいたいけど、今年のレポート日程は、もういっぱいだから、諦めるよ（笑）。

とにかく、政治経済学の中では、政治から制度を語るアプローチと、制度の細部から政治を語るアプローチの両方が必要で、いずれか一方に偏ると、間違える可能性が高まる。そのあたりは、「[勿凝学問 253 血祭りやだまし討ちにかかわるのは僕の仕事ではないんだよ——それが僕と政治学者の違いかな](#)」でもみておいてくれ。

「僕の仕事と重なる政治学者ってのは、面白いほどに制度の細部ってのを知らないね。僕の考え方は、年金にしろ医療・介護にしろ、税・財政にしろ、あるべき社会保障制度の細部、各論をつめて、その制度を実現するための政治はいかにあるべきかという、いわば細部を積み上げて政治を語るという論法。この時、あるべき制度の設計ができない人たちの論ってのは、だいたいいつも邪魔。それと、メディアの中の政治部ってのも、政局だ権力闘争だ政権交代だと盛り上がるのが大好きな彼らは気付いていないだろうけど、大方僕がやろうとしていることの妨害をしている——生活部とか社会保障部とかで生活に密着した取材をしながら、地に足のついた記事を書いている人たちとは違いすぎるね。

昨日、「本当は、毎週毎週レポートを課したいんだけどな。そんなことしたら、学生がいなくなる、2週間に一回でいいよ 笑」と話していたら、講義を終えると、ある学生さんが、「先生が、毎週レポートを課すとしたら、どういうリストを作られますか。そのリストを教えてくださいませんか」と言ってきてくれた学生がいたけど、Ⅲ巻の1章「医療経済学の潮流」は、読んでもらいたいところかな。あそこに、経済学の各流派を、相対的に眺めるこ

との重要性みたいなことを結構書いてある——脚注にいっぱい秘伝を書き込んでいるから、脚注も飛び抜かさずに読んでおいてくれ。

それと、I巻の1章「再分配政策形成における利益集団と未組織有権者の役割」もな。あの論文は、次からはじまる。

## 序 論

政策は、所詮、力が作るのもあって正しさが作るのではない。これを描写できる政策形成モデルを得たいというのが、本章の根底にある問題意識である。このモデルを構築するために所得の再分配に注目する。なぜならば、公共政策は必ず所得の再分配を伴い、これに着目すれば、公共政策のすべてを再分配政策という次元でとらえることができるからである。公共政策は必ず所得の再分配を伴うという言葉は訝しく思う人もいるかもしれない。しかし、所得の分配を修正するための再分配政策や、単なる補助金政策は言うにおよばず、公共がかかわる政策は、例外なく、所得の再分配を伴うのである。公共財を供給する

これが、世の中に初めて出した本の「本論」の冒頭——しかもこれが、社会保障の本。やっぱり、変わり者だったんだろうな（笑）。I巻の「序章」には、次の文章もあるので、どうぞ。

なお、この本のタイトルは、『再分配政策の政治経済学——日本の社会保障と医療』であり、このタイトルが、わたくしが本書のなかで論じた内容に最もマッチしている。しかし、わたくしの研究のベースは社会保障にあり、各章の底に流れている関心も主に社会保障をめぐる給付と財源調達の問題である。だが、多くの人には、わたくしが社会保障を考えると言いながら、なにゆえに、ほぼすべての章にわたって〈権力の話〉が登場するのかわかりにくく受け取られるかもしれないし、ヴェブレン、ミュルダール、それにガルブレイスの考え方が、分析の基礎になっていたり、ここ数年の研究のなかには、マキャベリの話などが出てくることにつながりを疑われるかもしれない。しかしわたくしのなかでは、これらはすべて、十分に、社会保障論なのである。これを弁明するためにも、わたくしが学部のゼミの時から「先生」であった藤澤益夫先生が、その著『社会保障の発展構造』（慶應義塾大学出版会、1997年）のなかで、多角的な論題を取り扱いながら、一つの社会保障論の構築を試みた際に引用された古人の言葉を、ここにも引かせてもらおうと思う。

いくらいろいろな野菜がまじっていても

全体はサラダという名のもとにまとまっている

モンテーニュ

このI巻の[第2版への序文](#)は、次。やっぱ、へそ曲がりだな（笑）。

一冊の本が、書店の本棚で読者の目にとまり、読み通してもらうまでには、大変なハードルを乗り越えなければならない。そしてこの本は、読んでもらうまでに超えなければならないハードルが、並大抵の高さではなかった。書名は固い、分厚くて値も張り、帯やカバーの袖の紹介文のような広告は一切ないばかりか、著者はまったく無名である（加えて出版社もメジャーではない）。それでも、何人かの人たちは、この本を書店で偶然みつけて目を通したり、書評に誘われて読んでみたりして、わたくしに連絡をしてくれてくれた。そういう形でわたくしに関心を寄せてくれた人との縁を、わたくしはとても気に入っており、大切にしている。

大学院、助手の時には名刺を作りもしなかった。7年間にわたる助教授時代を終えるとき、7年前に100枚作った名刺の半分ほどが余っていた。ゆえに、社会保障の研究をしている者が、ひとりここにいることなどはまったく知られておらず、結果、わたくしは不惑の年を超えるまで、厚生労働省や国立社会保障・人口問題研究所の場所も知らないままだった。いま思えば、そうした潜伏期あってこそ、歴史の長さでながめてみれば右へ左へと激しい評価の揺れをもつことが分かる制度・政策の深層部分を相手にして、考えてみては本を読み、本を読んでは考える暇をもてたのかもしれない——と思えるのであるが、ようは、多くの（いわゆる）著名な研究者の姿に自分の将来の理想をみいだせなかったから、少しは違った自分の途を削っていこうと、意識して潜んでいた一種の変わり者であっただけである。今でもメディアからのインタビューでは、名前はできるだけ出さないように、写真は生涯載せないようにと話をするわたくしが、助教授であった最後の年に、この本をまとめた。

そう言えば、昨日の講義では、次の第1巻序章の中の次の文章を読んだな。

ところでわたくしは、人物に少しでも関心をもつと、その人物の足跡を調べ、人を一生の長さでながめてしまう癖をもっている。経済学者もご多分にもれず、多くの経済学者の伝記や書簡集などにも目をとおす。そこでおぼろげながらに思うことがある。それは、経済理論というのは、ようするに、価値判断が一つの体系にまとめられたものであって、その価値判断の根差すところは、つきつめていくと、強い個性をもつ偉大な研究者ひとりひとりの好き嫌いに帰着するのではなかろうかということである。そして彼らの気質が陰に陽に映しだされた経済学書を読む側のわたくしにとっても、読んでいて好きになる経済学書と、そうはなれないものがある。どちらかと言えば、わたくしは、G. タロックの好悪の感覚よりも、A. B. アトキンソンの好き嫌いの趣味のほうに惹かれるし、J. ブキャナンやG. ベッカーの本は理論的にはエキサイティングなのだが、A. センの本を読むほうが心地よい。経済学というのは、どうにもそういう性格——そしてわたくしにとっての魅力——をもっている。

僕が今、君たちに植え付けているのは、「人物に少しでも関心をもつと、その人物の足跡を調べ、人を一生の長さでながめてしまう癖」なわけだ。以前話したように、この方面のオタクは、鉄道オタクなんかよりも、少しは実益があると思うぞ（笑）。

ついでに、Ⅱ巻「はじめに」の冒頭もみせてあげようかね。

## はじめに

どうにも人間が好きなのである。この生き物がいったい何をしてきたのか、そして何をしようとしているのか。どこまで自分たちがやっていることを自覚しているのか。たとえ人間が自覚する意識的な世界があったとしても、そこには絶えず偶然が襲いかかって彼らを翻弄する。こうした様子を観察しながら、人間や社会の動きに有りや無しやの意味を考えてみたり、わずかな兆しや綻びに着眼してはその後の動きを予測していたりすると、時がたつのを忘れるほどに面白くて仕方がない。こうしたわたくしの生業は、学生とともに社会保障や経済学の文献を読みながら、ああでもないこうでもない議論しつつ人間や社会の動く仕組みやあり方を考えることである。この職業に就くわたくしが、今日の日本における年金改革論議と、この国のなかに社会保障政策をいかに位置づけるべきか、その財源調達問題をどのように解いていくべきかという課題を題材として、1つの考えをまとめたものが本書になる。

Ⅲ巻の序章は、Amazonの[中見検索](#)で見られるよ。多くの学生が、この序章冒頭は、自分のために書かれたものだと思った模様（笑）。